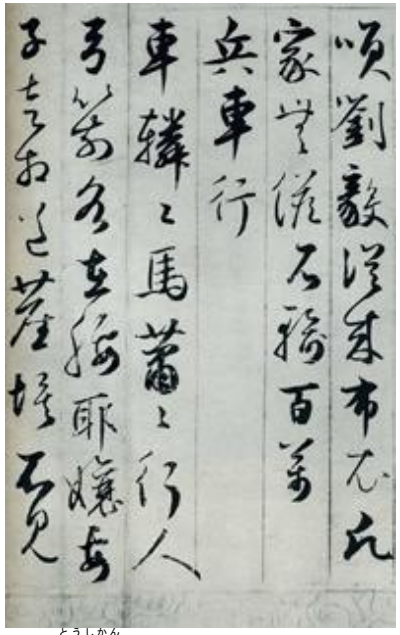
元の書つづき

趙孟頫や鮮于枢は古法への復古主義を主張し、康里巙巙らは古法を習得した上でそれにとらわれない個性的で自由な表現を追求した。

鮮于枢（1257－1302年）

元代、趙孟頫とならぶ書人。趙孟頫の若いころからの親友。中年以降は官を辞め西湖畔の虎林に隠棲し、読書や詩作、書や琴を楽しんだ。書は金の張天錫に学び、刻苦勉励して一家をなしたと伝えられる。行書は晋唐の筆意に学び、草書は懐素を学んだといわれる。1288年「祭姪文稿跋」を楷書で書いた。



「唐詩巻」部分　元・1296年

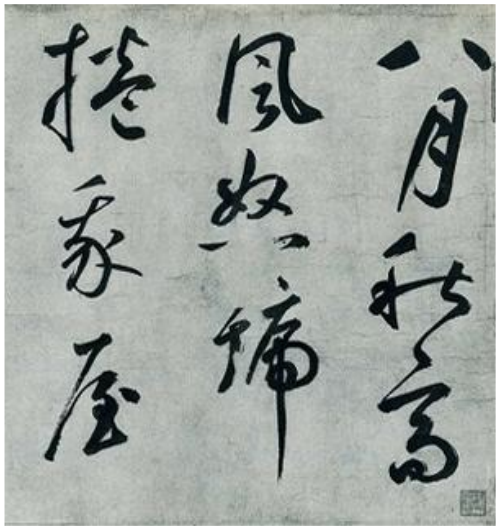
紙本　縦26.2㎝　行草書

界線のある紙に韓愈・杜甫・王翰の詩五首を百三十七行に書いている。

趙孟頫と同じく二王の伝統から出発しているが、趙孟頫に比べてより個性的である。巧みな運筆の抑揚遅速により変化と勢いのある美しい作品となっている。

「咲劉毅従来布衣願　家無儋石輸百萬　兵車行車轔轔馬蕭蕭行人　弓箭各在腰散耶嬢妻　子走相送塵埃不見」

康里子山（巙巙）（1295－1345年）



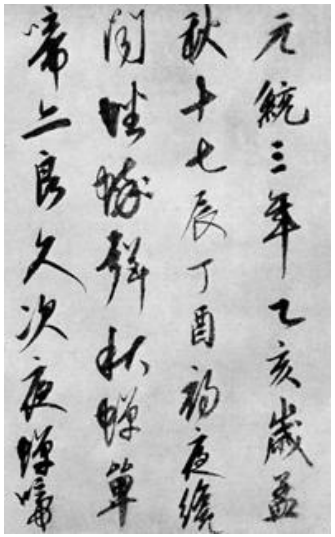
「杜甫茅屋為秋風所破歌」部分　元・1298年

京都　藤井有鄰館蔵　縦31.5㎝　杜甫の詩を草書で書いた詩巻。　「八月秋高　風怒號　捲我屋」

張旭や懐素を意識して書かれた草書であるが、二王の伝統を引きずっている。

詩の後にある自跋に「・・・三度筆をかえてはじめてできあがった。米芾が、今、世に伝わっている張旭や懐素の草書で、狂怪怒張して二王の法度のないものはみな偽物であるといっているのは、まことにそのとおりである。わたしもかなり長い間、草書をならっている。時には気に入ったものもできるが、このことばをいつも忘れないようにしている・・・」とある。

鮮于枢は「野で二人の男が泥道の中を荷車を引いていくのに出会った。その推したり引いたりする様から書法を悟った」といわれている。



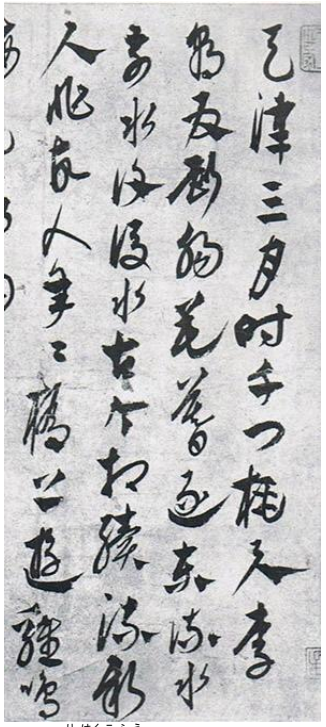
「秋夜感懐詩」部分　元・1344年

紙本　29×82.2㎝　行草書

亡くなる九ヶ月前の書。

楷書は虞世南を手本にし、行草は二王を手本にし、また米芾の影響をうけたらしいが、個性的な書風である。字形にあまりこだわらず一日に三万字を書いたといわれるくらい速筆であったらしい。

字を子山という。カスピ海の北あたりにいたトルコ系遊牧民の王族出身で、フビライに優遇された。書は趙孟頫につぐといわれたようだが、はたしてどうか。



「李白古風」部分　章草

紙本　35×63.8㎝

自由奔放な章草で書かれている。巙巙は李白をよく学んだと伝えられる。これは古風五十九首の第十九首を書いたものである。

「天津三月時、千門桃與李。朝為斷腸花、暮逐東流水。前水復后水、古今相續流。新人非舊人、年年橋上游。雞鳴・・・」

馮子振（1257－1327 年以後）
「贈無隠元晦詩」部分
紙本　32.7×102.4 ㎝
東京国立博物館蔵

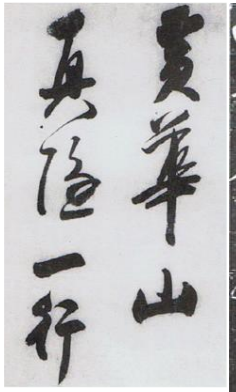
馮子振は僧侶ではないが、日本に墨蹟として伝わっている。趙孟頫とも親しく、禅宗にも精しかったらしい。
この書は、日本からの入元僧の無隠元晦に送った詩稿である。七言絶句三首を横幅14行に書いている。米芾の書風の系統。

楊維禎（1296―1370 年）
「張氏通波阡表」部分
1365 年　紙本　章草風
張氏の祖先代々の墓地である通波阡に立てるための碑文の原稿である。書は狂怪とわれ、奇想天外である。性格異常ともいわれるが、元末の文学界で独特の存在であった。

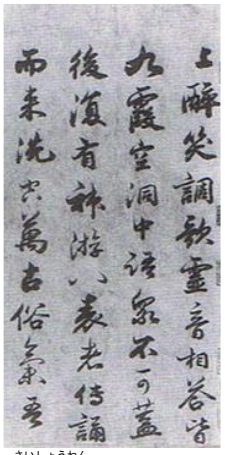
金の書

倪瓚（1301―1374）
「呉炳本蘭亭序跋」
1372 年作　元末四大家の画家の一人。倪瓚の書について、文徴明は「人品高く秀で、晋宋の人の風気がある」と絶賛している。王献之を学んだ脱俗の人。

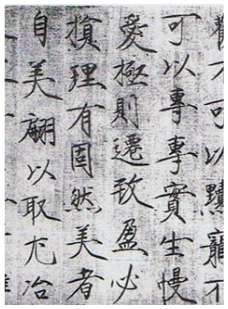
任詢「古柏行」
杜甫の詩を書いたもの。顔真卿風



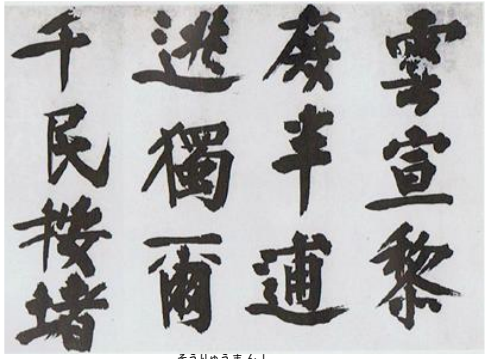
王庭筠
幽竹枯槎図巻題辞
自分の絵に書いた題辞。米芾風



蔡松年
「李白仙詩巻跋」
蘇軾風



金　章宗
「女子箴図」跋文
徽宗の瘦金体をまねたもの。



送劉満詩

耶律楚材（1190－1244 年）字は晋卿。禅に帰依し湛然居士と号した。
契丹人。遼の王族の子孫。金に仕えた後、チンギス・ハンの政治顧問となり、チンギス・ハン亡き後はオゴタイ・ハンに仕えた。
モンゴル人による殺戮や略奪をやめさせるための策を打ち出し、政治の仕組みや文化の大切さを教えた。
公正で広い視野を持った稀有な人物だったらしい。
文集に『湛然居士集』がある。

明（1368－1644年）―年表―

1336年　足利尊氏の幕府（室町時代－1573年）
1368年　朱元璋、**明を建国**し皇帝（洪武帝）となる。首都は南京
　元はモンゴル高原に撤退し北元として1634年まで存続する
1370年　日明交流はじまる
1373年　大明律令制定　明の禅僧、京都へくる。
1380年　胡惟庸の獄　李成桂、倭寇を撃滅
1392年　高麗滅亡、李成桂、朝鮮建国（李氏朝鮮－1910年）
1393年　藍玉の獄
1398年　洪武帝没
1399年　靖南の変
1402年　燕王、皇帝に即位（永楽帝）
1404年　日明勘合貿易はじまる
1405年　鄭和の南海遠征第1回（以後1432年まで7回）
1407年　北京に新宮殿造営
1408年　『永楽大典』成立
1421年　**北京に遷都**
1449年　土木の変　ミケランジェロ（1475年生）
1467年　日本（応仁の乱・文明の乱）
1494年　『三国志演義』　モナリザ制作（1505年頃）コペルニクス地動説（1510年頃）
1517年　ポルトガル人、広東にくる。　『水滸伝』制作年？
1529年　王陽明没す　**祝允明没**（1526年）
1543年　種子島に鉄砲伝来　『西遊記』制作年？
1547年　アルタン、全モンゴルを支配。**近代篆刻の始まり**
1550年　アルタン北京を包囲。日本から最後の遣明船出る。倭寇ふたたびおこる
1571年　アルタン・明の和議成立。　**文徴明没**（1559年）
1578年　アルタン・ハン、第三世ダライ・ラマを招聘
1592年　豊臣秀吉、朝鮮へ出兵（文禄の役）　『金瓶梅』制作年？
1597年　秀吉、また朝鮮へ出兵（慶長の役）
1599年　ヌルハチ、満州文字をつくる　**長条幅連綿草の流行**
1601年　マテオ・リッチ、北京に入る　ジョルダノ・ブルーノ火刑（1600）
1602年　マテオ・リッチ、『坤輿万国全図』刊行
1603年　徳川家康、江戸幕府をひらく　レンブラント（1606年生）
1616年　ヌルハチ、後金建国　ガリレオ異端審問　**傅山**（1607年生）
1624年　オランダ人、台湾占領　陝西を中心に農民反乱拡大
1626年　ヌルハチ没し、ホンタイジ即位　フェルメール（1632年生）
1631年　李自成、反乱をおこす　**董其昌没**（1636年）
1636年　ホンタイジ、国号を清と改め皇帝となる（清－1912年）
1639年　日本、鎖国を断行　**張瑞図没**（1640年）
1643年　ホンタイジ没し、順治帝即位。ロシア人、アムール川に達す。
1644年　李自成、北京を攻め、崇禎帝、景山で自殺。**明滅亡。**
　清軍、山海関を突破、華北に侵入。　**倪元路没**
　順治帝、北京紫禁城の玉座に座る。**清、中国王朝となる。**
　黄道周没（1646年）**王鐸没**（1652年）

永楽帝

14世紀後半の勢力地図

朱元璋（洪武帝）

ヌルハチ

17世紀の世界

紫禁城　北門の神武門から見たところ（故宮博物院の正門）

明

明は中国史上最高に繁栄した帝国であり、皇帝の権力が頂点に達した時代であり、それまでの漢民族の政治や文化を集大成した時代であり、現代の中国の基礎をつくった時代だと考えられている。はたしてどうか。

元はアジア北方のモンゴル人がシナを支配した王朝であった。

元の末期、旱魃、バッタの大発生、疫病の流行、大雨、洪水などの天災、朝廷内部では皇位継承をめぐる権力争い、財政破綻によるインフレ、重税、官吏の搾取、地主の横暴などで民衆の生活は悲惨極まりなかった。飢饉は慢性化し流民があふれ、各地で農民反乱が勃発した。

農民たちは「弥勒さまがこの世にお降りになって衆生をお救いなさる」と説く白蓮教に救いを求めた。

白蓮教は数百万の流民の集団を抱え、江南地方を中心に反乱を組織した。**（紅巾の乱）**

その反乱軍を最終的に束ねた朱元璋（太祖・洪武帝）は、１３６８年正月南京に明王朝を開き、北宋の滅亡以来二百五十年ぶりに漢族による統一国家を建設した。

明は元の政治・経済制度を継承して約二百八十年間つづいた。

朱元璋（1328－1398）は安徽省の極貧農出身で17歳の時、両親、長兄と死別して乞食坊主になり、25歳の時秘密結社白蓮教の郭子興組に入り軍事的政治的才能を発揮して出世し、有力者を束ね、41歳で皇帝になった。

洪武帝（朱元璋）は紅巾系でない洪武帝直系の軍をつくり上げ、独裁体制を実現するため、息子たちを秦王（西安）燕王（北京）など各地の王にして、それぞれに護衛のための軍隊を持たせ、それらを将来の皇帝直径の軍隊としてひそかに養成していった。朱元璋には24人の息子がいた。

「胡惟庸の獄」（1380年）１３７９年各地の息子たちが二十歳代になった時、皇帝はそれぞれの軍隊を南京に集結させ、突如、かつての同志の紅巾系の大臣である胡惟庸たちを処刑し南京城内の紅巾系の軍隊を襲撃し一万五千人を虐殺し、中書省を廃止して官庁を皇帝直属に改め、さらに大都督府を廃止して皇帝が参謀総長になり、御史台も廃止して皇帝が行政監察院の長官も兼ねることに改めさせた。ここに皇帝独裁体制が実現した。

「藍玉の獄」（1393年）功臣の藍玉の一家と紅巾軍出身者のほとんどが処刑され、白蓮教は社会の表面から姿を消したが、明末にまた反乱を起こすことになる。

朱棣・永楽帝（1360－1424）明王朝の全盛期を築いた皇帝。

第四子の朱棣は北方防備のため北平（北京）に燕王として封じられた。

「靖難の変」（1399年）第二代皇帝建文帝（朱元璋の長男の子）の即位を認めない朱棣は北平で兵を挙げ、南京へ攻撃を開始した。

他の王たちも朱棣に呼応して約四年間の戦いの末に1402年５月朱棣は南京を攻略し第三代永楽帝として即位した。（露伴の『運命』に書かれている）

北京遷都　1403年、永楽帝は、正式ではないが北平を都に決めた。

1406年、北京に城を造営する詔を出し、約14年かけて1420年に完成した。これが紫禁城である。紫禁城が完成した翌年の1421年に、正式に北京を明の都とした。

北京は国際都市として元代に建設され周囲28.6キロほどあったらしい。

北京は城壁で囲まれ、北京城という。何度も改修されている。

城内のようすを明末に描いた絵巻物が伝わっている。（「皇都積勝図」）

北京城の東西南北の中心線上に左右対称に皇城が築かれている。

天安門は皇城の正門であり、その奥に紫禁城がある。

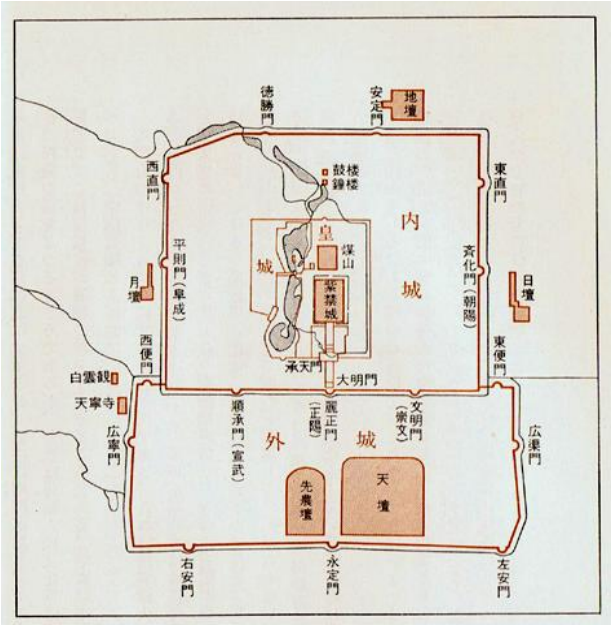
紫禁城は皇帝が仕事をし、生活をする場所である。

明皇陵の参道の 36 対の石像（朱元璋の両親の墓・安徽省鳳陽県）

大明孝陵神功聖徳碑　1413 年
永楽帝が父、朱元璋を称えて造らせた巨大な碑

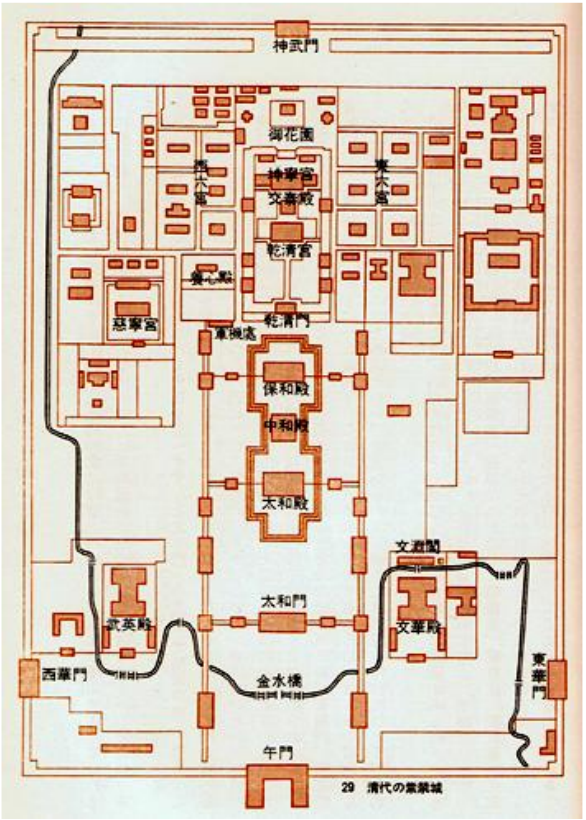
天安門

北京城と紫禁城



明代の北京城

東西約7キロ、南北約5キロ、城壁は高さ10m、厚さ約20m、芯は黄土でかため、表面を煉瓦でおおってある。南面の中央の麗正門が北京城の正面玄関。後に正陽門と改称、一般には前門。正陽門は公用、一般人は東側の文明門（崇文門）西側の順承門（宣武門）を利用した。東面には斉化門（朝陽門）、東直門、西面には平則門（阜成門）、西直門、北面には安定門、徳勝門があった。城内の中央に皇城があり、その正門が正陽門を入ってすぐにある大明門であったが今はない。大明門を北に進むと承天門がある、この門を清の順治帝が**天安門**と改称した。承天門からさきは宮城でこれが明代の紫禁城である。その北に端門があり、その先に午門がある。これは世界最大の門建築といわれ、この先が**紫禁城**と呼ばれ、1925年からは**故宮博物院**と改称され一般に公開されるようになった。



清代の紫禁城

紫禁城は、永楽帝の居城である。中国最大の居城といわれている。皇帝の権力の象徴である。

紫禁城は南北961m、東西753m、周囲を幅52mの堀（筒子河）と高さ10m超の壁がめぐらされている。明末には786の建物と9999の部屋があった。各建物は、午門（正門）から南北の中心線上に左右対称に一直線に並んでいるのが特徴である。

午門は高さ35.6mで世界最大の門である。入口は三つあり、中央の大門は皇帝専用である。

午門を入り金水橋を渡り外朝の正門である太和門を入ると外朝の三大殿（太和殿・中和殿・保和殿）がある。外朝は皇帝が政務を執る場所である。太和殿は皇帝の即位、婚儀、謁見などの式典が行なわれた所である。式典には太和殿広場に文武百官や儀仗隊千人ほどや馬などが整列した。広場には皇帝専用の御路という石敷きの道があり、御路以外は煉瓦が地下何層にも積み上げられている。これは地盤安定と地下からの攻撃を防ぐためである。深いところでは5mある。

太和殿の屋根の四隅には仙人を先頭に10匹の脊飾があり、脊飾の数が建物の等級を示している。

保和殿の後ろの乾清門からは内廷、内廷は皇帝の私的な生活の場所である。乾清宮は皇帝の寝所、その後ろに交泰殿、さらにその後ろに皇后の寝所の坤寧宮がある。これら内廷の三殿は後三宮と呼ばれる。坤寧宮の北側には御花園という庭園があり、そのまんなかに欽安殿がありその北に順貞門、その北に神武門（玄武門）があり、それが紫禁城の北門であり今は故宮博物院の正門になっている。その北には北上門、さらに北には景山門があり、その奥に倚望楼がありその後ろに景山がある。その北の観海殿、寿皇殿を抜けた北に北安門（地安門）があり、ここが皇城の北の出口である。

後三宮の東西にある多くの宮殿には皇子や皇女や女官たちが住んでいた。東華門の内側にある文淵閣では、内閣大学士たちが事務をとっていた。紫禁城は明・清王朝24人の皇帝が住み500年に渡って政治の舞台であった。

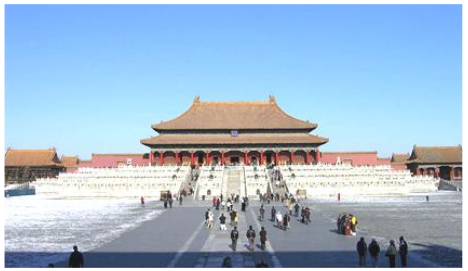
午門

紫禁城は、世界は陰と陽との相反する二つの「気」によって成立しているという中国古来の陰陽五行の思想に基づいて造られている。乾清宮の「乾」は「天」であり陽、坤寧宮の「坤」は「地」であり陰、交泰殿は陰と陽、天と地が交わる場所である。

屋根は黄色の瑠璃瓦、壁は赤色である。これは、黄色は中心を意味し、赤色は光を意味する中国古来の思想によるものであり、皇居が天下の中心にあり、常に光輝いていることを示している。

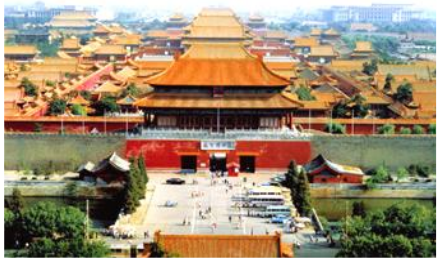
永楽帝はこの中国の伝統思想と伝統建築技法で紫禁城を築いたが、天帝が遣わした九匹の龍が築いたという伝説がある。北斗七星の北にある紫微垣という星座にいる天帝は宇宙を支配する神と考えられた。皇帝は天帝に認められた人間で天子と呼ばれた。天子は天命により国の統治を任されていると考えられた。

※北京と台北の故宮博物院には合わせて百七十一万点以上の収蔵品がある。

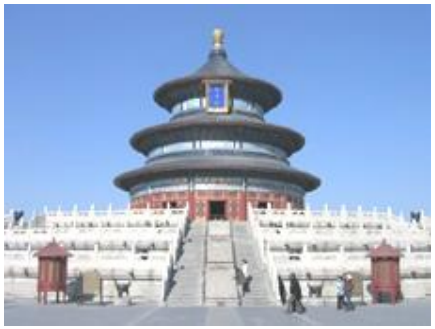


太和殿と太和殿広場

北東の角楼



神武門（故宮博物院の正門）



天壇の祈年殿　永楽 18 年創建

北京城内は皇城をはさんで東城と西城にわかれている。この区域には政府関係の建物、官吏の住宅、兵営などがあった。

一般人民の住居や商店は城外の南に発達した。

1544年人民を保護するために、この南側に新たに城壁がつくられ、これを外城といい、以前からあったものを内城という。

天壇は外城にあり、1420年永楽帝により建立され、皇帝が天に対して祭祀を行なうための祭壇である。祈年殿は、皇帝が五穀豊穣の祈りを捧げるための祭壇である。「天円地方」（天は丸く地は四角）、三層の屋根は三という陽数（奇数は陽で天を象徴している）、柱の数は上層から四本、十二本、十二本で四季、十二ヵ月、十二時辰を象徴するなど、中国の伝統思想（古代以来の宇宙観）に基づいて築かれている。紫禁城と並ぶ皇帝権力の象徴である。

明十三陵の定陵の地下宮殿

明十三陵の巨石像

出警図　部分　明代　　台北故宮博物院蔵

皇帝一行が陵に向かうようすが描かれている。

明十三陵

北京市の北にある天寿山の裾野に永楽帝の長陵から末代皇帝の崇禎帝の思陵にいたる13基の陵。

参道には巨石像が並び、地下宮殿もある。

皇帝は数千人を引き連れて、この明王朝の墓場に向けて北京城を出、先祖の墓参りをしたようである。中国の伝統を体現した偉大なる皇帝を人民に印象づけるためのパフォーマンスであったのであろうか。

万里の長城（明代）

万里の長城

万里の長城は戦国時代（紀元前4世紀頃）に各国で作られていたものを秦の始皇帝がつなげて大長城としたが、大部分は明代につくられ完成されたものである。明代には技術開発が進み、初めて煉瓦を使うようになり、滑車も開発されて効率よく頑丈な城壁をつくれるようになった。長さは東端の遼寧省虎山から西端の甘粛省嘉峪関までなら約8852km。

永楽帝は積極的に長城を増築し、永楽帝亡き後も事業は続けられ170年にも及んだ。永楽帝の長城建設はモンゴルに対する防御が目的であったが、長城は明朝の国力を誇示したものではなく、これより北には領土を拡張する力がないという、明帝国の力の限界をも示している苦悩の傷跡なのである。永楽帝は60歳過ぎても自ら長城を越え何度もモンゴルに遠征したが勢力を拡大することなく、65歳で遠征の帰路、病死した。

鄭和の海外遠征

永楽帝の命令で宦官の鄭和は28年間に七回の大航海をした。大船団は東南アジア、インド、イスラム圏からアフリカ東海岸にまで達している。1405年江蘇省蘇州の劉家港からの航海では大船62隻に二万七千八百余名の兵士が乗っていたといわれている。

航海の目的は明王朝の国威を海外に示し、諸外国と交流し貿易をすることであったと思われる。鄭和の船団には輸出のための陶磁器や絹織物など中国の最高の物が積まれていた。そして鄭和は諸外国の珍しい物（キリンなど）や文化を明にもたらした。鄭和は西アジア産のコバルト顔料の「蘇麻離青」を輸入した。その結果、永楽帝時代の青花磁器を明を代表する焼き物にした。

鄭和像

鄭和の航路

坤輿万国全図

日本の部分

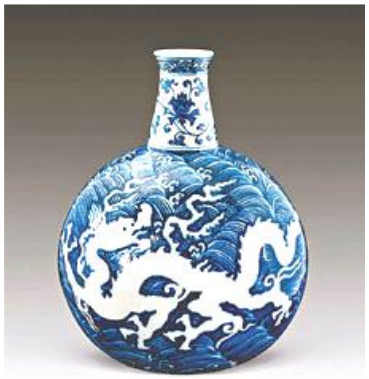
マテオ・リッチが伝えた当時の最新知識は日本の知識人にも大きな影響を与えた。この最新の世界地図は日本にも輸入された。

マテオ・リッチ（1552－1610年）

イタリア人。イエズス会宣教師。万暦帝の時代、明朝宮廷で活躍し明にヨーロッパ文化を、ヨーロッパに中国の文化を紹介した。北京で没。『坤輿万国図』はマテオ・リッチにより1602年に北京で刊行された。縦約170cm、横約360cmの近代的世界地図である。漢訳版。世界で初めて「日本海」という表記がある。地球は球体という説を基に、中国を図の中心に描いている。北海道も描かれている。リッチの世界地図は新しい世界像を示し、学問や思想に大きな影響を与えた。

明代の陶磁器　江南経済の発展が景徳鎮の陶磁器製造に影響し、初めて色鮮やか五彩磁器が登場した。鄭和が西アジアから持ち帰ったペルシャ産の蘇麻離青は史上最良の呉須とされている。それを使って明代を代表する青花磁器がつくられ海外に輸出された。また明代には五彩と呼ばれる色絵陶磁器が盛んに作られた。景徳鎮民窯で万暦年間に作られた色絵陶磁器を日本では「**万暦赤絵**」とよび愛好者が多い。中国では「万暦五彩」という。

※龍の文様は皇帝のシンボルである。　※五彩とは赤・緑・黄・紫（青）・白色のこと。



青花海水白龍紋扁瓶

永楽期　北京故宮博物院蔵

コバルト顔料の海の中に白い龍を浮き上がらせている。

景徳鎮官窯？

青花蟠龍天球瓶　官窯？

永楽期　台北故宮博物院蔵

白磁に蘇麻離青で青龍が描かれている。景徳鎮官窯で作られたと思われる。

五彩雲龍紋觚　景徳鎮窯

万暦年間　北京故宮博物院蔵

五彩龍鳳文面盆

1573年作（万暦年間）景徳鎮窯

東京国立博物館蔵

赤絵は白磁に染付（釉下コバルト）と赤絵（釉上に焼き付ける赤・緑・黄・紫の釉薬）を併用した陶磁器。

絵画　明初、画院が復活されたが、その画風は技巧本位の形式主義におちいり、画院はしだいに衰微していった。元末に盛んであった文人画は、朱元璋の蘇州攻撃で廃れてしまったが、明の中頃から江南の経済の発展と皇帝権力の弱体にともないふたたび蘇州を中心に元末四大家の流れをくんだ文人画（南画）が盛んになり、呉派（明の四大家の沈周、唐寅、文徴明、仇英）の文人画家が活躍した。彼らは北京の腐敗した政治を嫌い、職を辞し、芸術活動に専念した。さらに明末の董其昌の出現によって文人画は画壇を独占した。（絵画については後で再考察する。）

沈周　夜坐図軸

十六世紀以後、官界の腐敗や内紛により明朝は衰退していった。

破綻した財政を立て直すため、皇帝の代理として各地に派遣された宦官たちは税関を私物化して私服を肥やした。商人たちは重税をかけられ、宦官の横暴に耐えかねて暴動を起こすようになった。

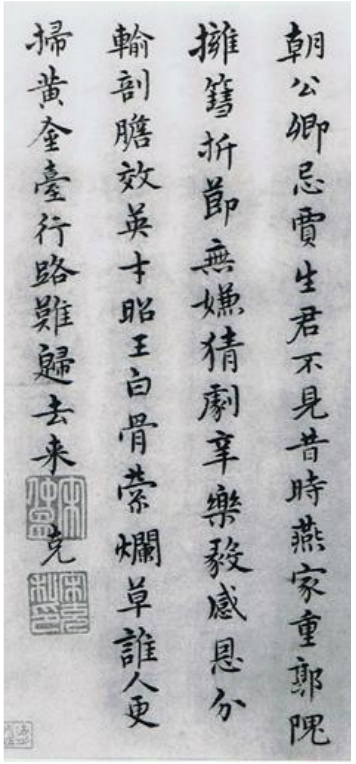
明末、陝西地方に大飢饉がおこり、飢えた民衆の反乱がはじまった。たちまち暴動は中国全土に拡大し、流賊の指導者がつぎつぎに現れては消えていった。その中から頭角をあらわした李自成は１６４３年西安を占領し、国号を大順と改め、１６４４年初め居庸関を経て北京に迫ってきた。第17代皇帝崇禎帝は紫禁城の裏の万歳山（今の景山）の寿皇亭に逃げて首をくくり自殺した。（享年34歳）ここに２７６年つづいた明朝はほろびた。その後、清軍に敗れた李自成は、紫禁城で即位して皇帝を名乗り宮殿を焼いて金銀財宝を略奪して西安に逃げたが、大順は清によってわずか数か月で滅び、清が北京を制圧した。※露伴の小説『暴風裏花』は崇禎帝の最期を題材にしている。

書

明代は中国古来の漢民族の文化が花開いた。朱元璋は漢文化の復興を目指したのは良いが、文人画を嫌い、秩序を重んじるあまり画一的で形式的な規律を政治の世界だけでなく文化芸術にも求め、芸術家たちは恐怖のなかで、精彩に欠けた作品を生むことになった。しかし、しだいに進む政治の腐敗衰退とはうらはらに、書画芸術は明代中期から末にかけて生き生きと表現されるようになり盛大になっていく。明代は宋末にはじまった条幅形式が確立した時代である。

三宋二沈　明代初期の能書として伝えられている宋璲・宋克・宋広・沈度・沈粲を三宋二沈と呼んでいる。

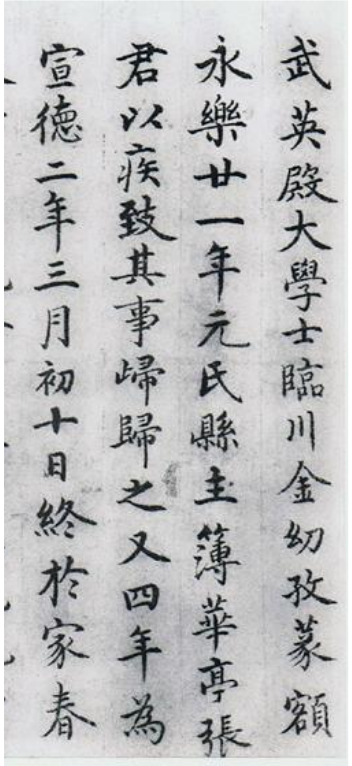
彼らの書法は基本的には、元代の趙孟頫の復古主義の影響を受けた伝統書法である。



李白行路難　部分　紙本
23.9×36.4 cm

宋克（1327－1387）

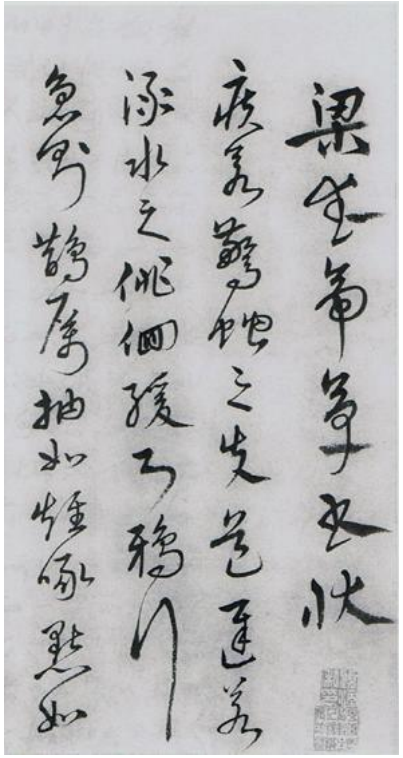
魏晋の正統な伝統派。
典雅でくせのない美しい字である。
草書、章草が上手かった。



張桓墓碣銘稿　部分 1427 年　紙本

沈度（1357－1434）

宋克の楷書を受け継ぎ干禄体の基礎をつくった。
永楽帝に好かれ、弟の沈粲とともに朝廷の重用文書はすべて書いたといわれている。
この書は 71 歳の筆。流麗な整った楷書であるが弱い。

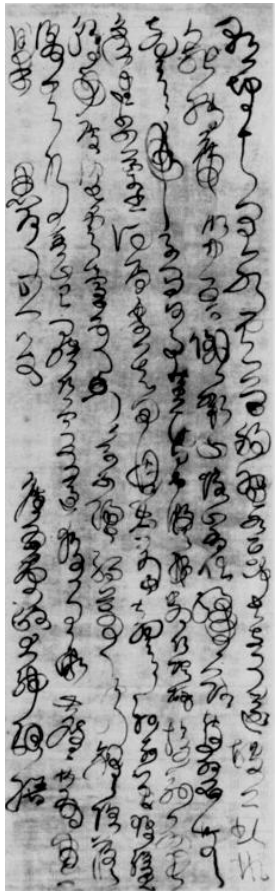


梁武帝草書状　部分　紙本
縦 28.9 cm

沈粲

沈度の弟。
草書が上手かった。章草も得意であったといわれている。
この書もところどころが章草風に書かれている。
「梁武帝草書状　疾若驚蛇之失道。遅若渌水之俳徊。緩則鴉行。急則鵲厲。抽如雉啄點如・・・」

解縉（1369－1415 年）



草書大軸　絹本　248×73.3 cm

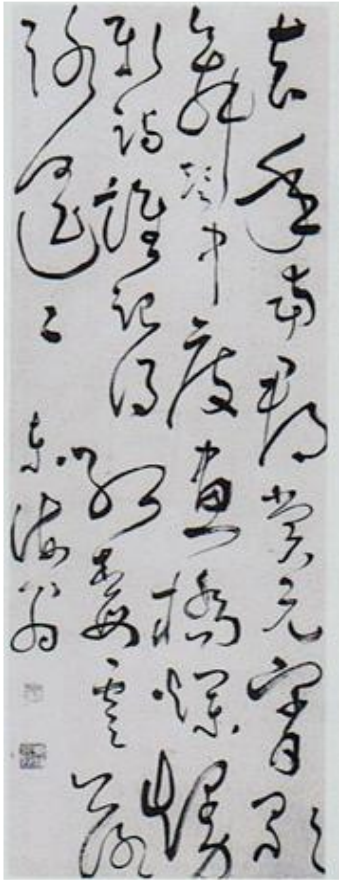
懐素や呉説の遊糸書の系譜の狂草である。20 歳で科挙に合格し、進士となった俊才で朱元璋に認められたが、40 代で獄死した。

姜立綱（生没年不詳）当時は大変な名声を博したが、明の中頃から、古法を無視した黄庭堅らの書が流行するようになってからは、姜立綱の書は俗書として忘れられていった。

楷書千字文　部分　早稲田大学蔵

宮廷書家の端正な楷書である。

沈度の影響がある。



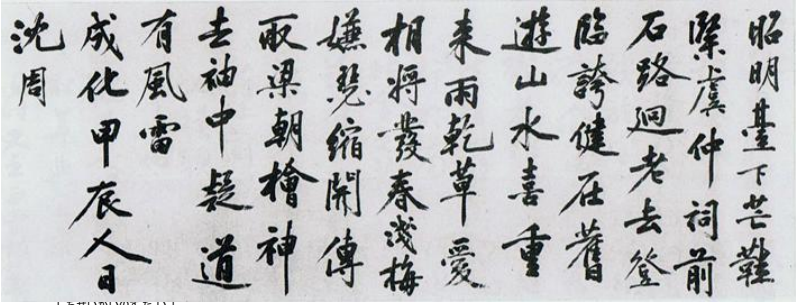
草書詩軸　狂草

張弼（1425－1487）号は東海。詩文にすぐれたが、特に書家として知られ、その草書は海外にまで知られていた。

草書は宋広を師とし、懐素を学んだといわれる。生前は草聖といわれ人気者だったようだ。

沈周（1427―1509）

※七星檜は、致道観に生えていた七株の桧のことで、沈周はそれを絵に描き、七律一首を作って題したもの。



七星桧図題詩　1484　紙本　縦 46.5 cm

盧山高図　1467 年　紙本墨画台北故宮博物館蔵

沈周は明代中期の文人画家で、詩書画三絶といわれる。呉派の祖。蘇州文壇の大家。蘇州の出身で字は啓南、号は石田・石田翁・白石翁。富豪の生まれで家訓を守り仕官することはなかった。沈一家は朱元璋に恨みがあったようだ。沈周は西域人の血が混じっていたようで、彫りが深く青い目だったようである。

画は元末四大家に私淑し、家法を継いだ。書は黄庭堅を法とした。詩は白居易、蘇軾、陸游を好んだといわれる。

門下に唐寅、祝允明、文徴明がいる。文徴明は沈周の跡を継いで呉派を発展させた。詩文集『石田集』がある。

宿題　王羲之と「蘭亭序」の八柱第一、二、三本と呉炳定武本について感想を述べよ。